

論文要旨

中上健次の言語戦略

—「物語」における「空洞／うつほ」概念—

須賀真以子

本研究は、中上健次（一九四六—一九九二）の文学を主な分析対象として、その「物語」との関わりを、「空洞／うつほ」という言葉をキーワードに考察するものである。

中上の作家としての活動期は、ちょうどポスト・モダンと呼ばれる状況が到来し、「大きな物語」の権威が失墜する一方で、狭義の物語についても物語批評を初めとした新しい読み方が隆盛した時代であった。中上もまたその流れを受けて、自ら「物語」論を試み、小説において実践していった。中上の「物語」論は「物語」を文字テキストとしてだけでなく、「法・制度」として捉え直すものである。「物語」をこのように捉え直すことで、小説に奥行きを与える積極的な意味だけでなく、人々の思考形式を束縛する負の意味をも見据えていくようになった。中核をなしていたのは「空洞／うつほ」と呼ばれる概念であり、物語構造において、語りを動かす、エネルギー生成の磁場として捉えられる。「物語」が語られた瞬間から諸関係を固定してしまうを防ぐために、動的な概念を呼び込んだのである。本研究ではこの概念が中上文学全体に敷衍できるものではないかと考え、作品における発現を以下の四つの側面から追究した。すなわち、a 物語構造面、b 認識面、c トポス面、d 語り面である。これらの四つの側面は互いに連関し、小説において「物語」を活性化すると同時に脱構築している。

「第一部 書く「私」と「言葉」——書記行為意識における「空洞／うつほ」ではb 認識面を中心に、『海へ』『化粧』『紀州・木の国根の国物語』という三作品について考察し、「書くこと」にまつわる「空洞／うつほ」の問題系をそれぞれ抽出した。初期作品「海へ」においては遍歴の果てに見出される小説の〈言葉〉の混沌と、過剰な描写によるイメージの氾濫とを見出し、『化粧』においては「短篇小説の力」の発露とその抑圧構造に抗うものとしての過渡的な語り手の存在を、「女語り」と比較しつつ論じた。また、『紀州』においては書き言葉の権力性を自覚することで、「事実」を書くことの困難に突き当たる過程を通じ、その困難を知りつつ書くことを遂行する際に、「空洞／うつほ」という認識も見出されるのではないかと考えた。

「第二部 見出されたトポス、喪われたトポス」ではc トポス面を中心に、『宇津保物語』『十九歳のジェイコブ』『千年の愉楽』という三作品を題材として考察した。中上の「物語」論において「空洞／うつほ」とは元々原初的な物語（＝モノカタリ）内部の神話空間として捉えられてきたが、上記のいずれの作品においても、そのような空間でありながらそれ自体では完結しないものとしてのトポスが存在していることをつきとめた。すなわち、『宇津保物語』における「熊野」と「吉野」が「空洞」を抱えた主人公の内面と響き合い、『十九歳のジェイコブ』における「モダンジャズ喫茶店」と「故郷」との拮抗がテキスト外現実とテキスト内物語とのねじれをもたらし、さらには『千年の愉楽』における「路地」が、一見特権的なトポスとして造形されながらも、その特権性の根である「物語」が脱臼していく様をも語

られるものとして存在していると結論づけた。

「第三部 「語り／カタリ」の構造によって発現する「空洞／うつほ」ではd語り面を、a物語構造面の生成と関連させ、『重力の都』『奇蹟』について考察した。『重力の都』においてはその連作としての性格を追い、様々なモチーフを、レベルを攪乱させながら複数の短篇において用いることで、「物語」を絶えず動かす運動の軌跡として「空洞／うつほ」が現れていることを確認した。一方『奇蹟』について、喪われた「路地」がパロディ的身振りによって語り直され、最終的に「物語」の終焉にいたるまでが描かれていると結論づけた。この「物語」なきあとも身振りを繰り返すことが登場人物によって期待されるが、それを小説として描きつづけることの困難は、中上後期の作品における困難や途絶を招いたのではないかと考えた。

さらに、同時代の他作家の文学においても、語りの枠組においてそのような「空洞／うつほ」が見出されることを、吉増剛造『オシリス、石ノ神』を用いて論証した。『オシリス、石ノ神』は過剰な「引用」と、窮極的には決定不可能な「私」という存在とを前面に押し出すことで、「大きな物語」によりかかることを回避しながらゆるやかな統一を保つ詩集となり得ている。

以上のように本研究では、中上健次の作品群について、小説における「物語」利用に伴って様々な「空洞／うつほ」が生起し、それが「物語」への抗いと愉樂の享受という、両義的な態度と連関していることを明らかにした。さらにそれが同時代の他の文学作品にも共有されることを確認し、「空洞／うつほ」を抱えた「物語構造」というモデルの有効性が見出されるのではないかという展望を得た。